

七たび生まれ国に報ず（遺書より）

広瀬 武夫



〔第十五話〕

明治元年（一八六八年）今の大分県竹田市に生まれた広瀬武夫は、体格は良いくせに泣き虫の少年でした。父が岐阜県高山の裁判所長となったので、飛驒高山で育ちます。

海軍兵学校を卒業した時の成績は、八十名中、六十四番です。早くから講道館こうどうかんに入門しており、海軍の学校に柔道を取り入れたのには広瀬の力が大きかったといわれます。

明治二十三年、講道館の紅白大試合で、初段の広瀬が黒帯を五人投げ、六人目の二段と引分けた話は有名です。ロシア留学中、海軍省で腕力のすぐれた三人の

巨漢を投げ倒し、これがロシア皇帝の耳に達し、広瀬の柔道が見たいと所望され、宮廷の庭で今度はレスラーを相手にして苦もなく投げ飛ばします。

さらにピアノにも秀でていて「荒城の月」を皇帝の前で演奏し、皇后が「この曲は本当に日本人の作か」と感嘆したという話も伝わっています。皇后ではなく貴族階級の誰かであったのかもしれませんが、そんな伝説が生まれるほどのピアノの名手でもありました。

「荒城の月」の作曲家、瀧廉太郎は故郷、竹田の後輩で、ドイツに留学中、会いに来てくれた広瀬に「最近の作です」と楽譜を見せたようです。

明治三十七年日露戦争が始まり、広瀬は旅順港閉塞作戦で、壮烈な戦死をとげました。

決死の作戦へ出発するにあたり、同僚の一人に語っています。「ロシア東洋艦隊を首尾よく旅順港内に閉じ込めたなら、東郷司令長官の許可を得て、単身ジャンク（中国の小さな船）で旅順に赴く。敵の司令長官に会い、まごころをこめ

て降伏こうふくをすすめ、無用の血を流さないよう説得するつもりだ。そういうときのためにこそ、自分はロシア語を習ったのだから」と。これが広瀬の武士道だったのです。

東京大学や東京外国語大学の図書館には、広瀬が単なる軍人ではなく、軍事・地理・語学はもとより、文学・演劇・オペラにいたるまで、いかに幅広い勉強家であったかを示す、沢山の蔵書が寄贈されているとのこと。

※広瀬 武夫（ひろせ たけお・明治三十七年（一九〇四年）戦死・三十七歳）

◎ 広瀬武夫が「柔道とピアノ」の名手とは驚きました。

◎ 広瀬武夫の思慮しりょ深さは、幅広い勉強の成果と感じました。私ももつと学ばねばと決意しました。

◎ タイトルの七たび生まれ国に報ずの出典は、「七度、人として生まれ変わり朝敵を誅ちゆうして国（南朝天皇家）に報むくいん」という言葉からです。（M生）